

【春日保育園】

●2025.1.28 ふりかえり①(副園長先生、先生 1 名、スタッフ 1 名)

スタッフ:お願いします。

先生:

お願いします。

まず、大きな石を積み木みたいに積み上げる遊びを始めたというところで、石だけではなくて他のものも積み上げてみようというチャレンジや、そういう発想にもつながっていけばいいなという部分がありました。また、穴が空いている葉っぱに糸通しのような感じで葉っぱを通していったりしましたが、葉っぱを 1 個のツタに入れて輪飾りみたいにしたとか、今後穴に通すだけではなくてそれを遊びに使うような展開もされていったら面白いなというのが、当日のラーニングストーリーでありました。その時にツタを使ったことから、ツタをお帽子にして載せてみるなど、最近ツタ遊びに少しはまりだしています。

スタッフ:長いものに目が行くようになったわけですね。

先生:

目が行くようになって、上からぶら下がっているものを引っ張って引き抜いてみたり、それを「うんとこしょ、どっこいしょ」と、ちょうど上のクラスがカブの劇をやったこともあり、引っ張るような遊びが子どもたちの間で結構広がったなという印象があります。

スタッフ:これはどこですか?(ラーニングストーリーを見て)

先生:

すぐそこに春日丘という坂の丘があります。その奥のちょっとした広場を、近所の方が「ここ、もしよかったら遊んでいいよ」と言ってくださいましたので、時々遊びに行かせていただいています。そこにこういう長いツタがすごくたくさんあるので、子どもたちはそこに行くとツタがあるということを覚えていて、引っ張っています。

スタッフ:知っているのですね。すごいです。

先生:

それを持ってみんなで電車ごっこを始めたり、最近そういう自然物の遊びが広がったかなという印象があります。

当日、色水とかも少し向こうの畑でやった記憶がありまして、お花や葉っぱを入れて。

スタッフ:ぐちゅぐちゅぐちゅと。

先生:

そうです。ぐちゅぐちゅぐちゅとやって、その後、帰り道に「リンゴ、リンゴ」とリンゴの歌を歌い始めたりして、子どもたちがどこかで関連づけながら楽しんでいるなという印象がありました。私は本当にこういう自然物だからこそすごく五感を刺激されるなということを思っていて、当日のスタッフの方の声かけで「匂いはどう」や「感触はどう」など、子どもたちが五感を意識できるような声かけをされているのを見て、私たちもまねしていこうかなと思っています。

スタッフ:うれしいです。

先生:

子どもたちに強制的に刺激させるのではなくて、自発的に触れるようになるとか、意識せずとも学んでいくというところで、匂いや触感や色の違いがどうか、やはりそういう声かけを保育士がすることで気づけるところもあるのかなと思います。ですので、私たちもまねしたいなと、そこから声かけさせていただいています。

スタッフ:最近も行ったときには意識して声かけをなさったんですか。

先生:

それこそこの前、これは畑でお料理をしているところで、たくさん野菜の葉っぱや木の実が落ちていたので、それを 1 人の子が潰し始めました。そうすると水分が出てきて柔らかくなったり葉っぱの匂いが出てきたりしたので、「すごく匂いがするね」と言ったら、子ども同士で匂いをかいで「何の匂いだろう」、「すっぱいかな」と話が広がっていったりして、そこからほかの子も潰し始めたんです。少し遊びの展開が広がったかなと思いました。これからも声かけを意識したいなと思っています。

スタッフ:いいですね。

先生:

どんぐりなども落ちていて「音、鳴るかな」とか、山でもこの前シャカシャカしながら、そんなところも五感を意識しながら声かけができるようになってきたかなと少し思います。

スタッフ:いい写真ですね。この黄色いのは、大根の葉っぱの黄色ですか。

先生：

葉っぱの落ちていたのが混ざっていましたが、これはもう少し奥のほうに行ったときの花で、この辺に赤い葉っぱが少し落ちていますけれども、「これはトマトだ」って言って持ってきていました。

スタッフ：これはクラスの写真ですか？

先生：

そうです。この 1 枚も同じこのツタのあるところで、一生懸命みんなで引っこ抜いたものを 1 人が集めて抱えて持って歩いていた。

スタッフ：こうやって潰すと匂いにも気づきますし、絵の具みたいに色が出たりします。

先生：

それこそ赤い木の実が落ちていて、それをすりつぶしたときに、木のところと石が赤くなって、少し水も含んでピンクがかったので、「ピンクだ、ピンクだ」と言って変化をすごく楽しんでいました。

スタッフ：

潰すということはすごく手の力を鍛えたり五感も刺激したりして、ここからごっこ遊びも始まりますね。

先生：そうですね。

スタッフ：

こういう野菜とかだと、葉っぱは初め緑だけれどもだんだん色が変わっていくこととか、いろいろな気づきにつながっていきますよね。

先生：すごく面白いなと思います。

スタッフ：これはすごくいい場面ですね。ここなんてまじまじと見ています。

先生：

そうですね。じっくりと。本当、顔とくっついてしまうのではないかというぐらい、じっと見ていたりして。

スタッフ:この棒もきっと何か道具に見立てているんでしょうね。

先生:そうだと思います。

スタッフ:

それを「貸して」とか、そういうコミュニケーションも生まれて、すごくいいですね。これ 1 枚だけで、一人一人のいろいろな、どこを見ていて何をしようとしていて…。

先生:

それこそ畑は、本当に遊び込む姿が増えました。やはり最近支度が早くなって、外に出る時間が伸びたこともあります。

スタッフ:2 歳児さんはすごいですね。

先生:

遊び込んで満足して帰ってくる姿も見られるようになって、本当にここは集中して、帰るまでずっと遊んでいました。

スタッフ:この石は、まな板やお皿というふうに見立てているということですよ。

先生:そうだと思います。

スタッフ:

平らだとかいうことができるとか、その石の形によってもきっと何か違うものに変化したりして…。

このラーニングストーリーは、これからどうなっていくのでしょうか？

先生:

本当ですね。

1 人はこうやって丸めて載せてみて、何人かは電車のようにつないでみたり体にかけてみたりしています。1 回、水たまりができていたときがあって、そこにこのツタを落として釣りのようなことも始めて「発想が面白いな」と思いました。

多分積み木などの遊び方が決まったおもちゃより自然物のほうが、子どもがいろいろなことを想像して表現できるのかなとすごく感じました。

スタッフ: そうなのですね。水たまりに入れて、そのうちパシャパシャパシャっとか。

先生: そうです、「雨だ」とかやっていました。

スタッフ:

言いそうですね。

今、私は友人に進められて『遊びと利他』という小さい本を読んでいます。まだ終わりまで読めないでいますが、その本を書いた人はもともと遊びや幼児教育の専門家では全くなくて、メディア論などをやっている研究者さんです。「利他」というのは「利己」の反対のほかを思うという「利他」ですけども、どういう遊びがその「利他」の精神、行動や気持ちを養うのかというのを、いろいろな公園や私たちのような遊びを媒体にしている団体などと幾つか調査をしています。裏山があってすごくいろいろな遊びができる幼稚園や、プレイパーク、あと普通の都市型の公園での遊びなど、4 つぐらいを比較しています。

遊具についても、子どものこういった行動を引き出すかが遊具の形によって違うとか、いろいろ書いています。やはりスリリングな遊びが子どもは好きということで、昔はぐるぐる回る、丸い地球儀やジャングルジムのようなものがありました。あれだとすごくスリリングで面白いけれども閉鎖的で、中にいる子は「勝手に回されて怖い」、回す子は回す子で一生懸命回すんだけど、外と内で乖離してしまうところがありました。私は見たことがないんですが、それと似たようなもので少し湾曲したドーナツ型の遊具の写真があります。見たことはありますか。

先生:

聞いたことはないですけども、見たことはあります。永遠に回ってしまうというものですね。

スタッフ:

そう、ぐるぐるですよ。でも回す子は回すんだけど、ぱっと乗れるんです。球のも大きい子は乗れますが、これは乗ったり、中に入ったり、入れ替わって遊べるものです。

中にいて「怖い」だけではなくて、回すほうになったり乗っかってみたりという、いろいろなコミュニケーションが生まれるような遊具も、行動として何を引き出すかといったことが書いてあって、すごく面白いです。

それだけではなくて、やはり自然の木だとか坂だとか、そういったものには余白があるそうです。石もこれ1 つでいろいろなものに変身して、子どもが自分の想像力を発揮する余白があります。そうするとやはりコミュニケーションが生まれて、自分が楽しいだけではなくてお友達も楽しいとか、**みんなで関わり合いながら楽しさを作っていくという余白**が見られます。その余白のある遊びがどういうものかとか、その場をどう作ったらいいかといったこと

が書いてあります。すごく面白くて、もう少しで終わりそうなんだけれども、ぜひおすすめします。今日持ってくればよかったですけども。

先生:『遊びと利他』ですか？

スタッフ:

そうです。それで「利他」と「利己」というのは対極のようだけれども、実は対極ではありません。自分が楽しいというのが「利己」だけれども、でも友達も楽しいというのが絡み合って、そうするとみんなで楽しいという「利他」につながっていきます。**遊びってやはり幼児期には本当に大事なものを育ててくれるものだと思います。**

副園長先生:幼児期の学びは遊びですよ。

スタッフ:この先生も、探求も遊びの中から生まれてとおっしゃっていました。

副園長先生:県立短期大学の永倉みゆき先生を御存じですか？

スタッフ:聞いたことがありますね。

副園長先生:

その先生が年 1 回、保育のコンサルテーションに来ていただいているのですが、子どもたちが遊んでいる畑や山と一緒に歩いて見てもらっているんです。そうしたら、うち以外の自然がないところの園では、斜面がないからボルダリングを作るし、山がないからジャングルジムを作っています。でもここは園庭にジャングルジムもボルダリングもないけれども、それは**畑に行ったり山に行けば普通にある**ので、そのほうが全然いいですと。

先生がおっしゃった**遊びの余白**というのは、要は遊びの広がりですが、自然の中は本当に広がりがあるという話もしてくださいました。どんどん遊びが展開して発展して「いいですね」なんて、先生と同じようなことをおっしゃっていました。

「利他」と「利己」も、昔グランシップで演劇のリタとリコという舞台を見に行ったことがあります。それは最初、リタとリコは最初は人の名前でしたが、結局見ているうちにそういう「利己」と「利他」のところの話になっていって面白かったです。

スタッフ:面白いですね。ちゃんとこうやって実践されて、どんどん深められていますね。

副園長先生:このクラスは、本当によく遊びます。

スタッフ:よく遊びます。観察力もすごいし、あのカタツムリもすごく面白かったです。

先生:

あの後もあの壁でカタツムリを探して、この前ようやく見つけました。行きと帰りに「バイバイ、またね」、「何で落ちないんだろうね」とか言いながら、すごく興味を持っていました。

副園長先生:

それこそ去年の1歳児クラスの時分から、おやつを食べるともう外に出ているような感じでした。今までは割とおやつを食べた後はお部屋でゆっくりといった感じで、ずっとそうでしたけれども、このクラスはもう「あれっ」という間に外に出ています。

先生:

そうです、やはり外のほうが…。みんながゆっくりとおやつを食べている時間に、既に外に出ています。

副園長先生:そうです、ちゃっちゃっちゃちゃーと。

スタッフ:活発ですごいですね。

副園長先生:

でもそれは結局先の楽しみの見通しができているから、早く外に行くためにはもうどんどん支度も早くしてね、そういうところはすごくクラスの雰囲気として出来上がってきています。0歳から2歳の3年間もってくれていますけれども、やはり日々の習慣ですね。

先生:そうですね。

スタッフ:積み重ねですね。

副園長先生:

生活は一つのルーティンになっていますよね。そのルーティンのところがやはり0歳から積み上げてきているので、そんなに遅れる子がいなくて、みんな一緒に動いているという感じがします。ですから集団行動というよりも自然に流れができていて、遊びに行くためにみんなと一緒にいくけれども、その集団行動の部分は保育者が言わなくても、子どもたちがみんなであーっと流れて動きます。つなぎの部分では一緒にいくけれども、遊びの場に行けばもうそれぞれがという、そこがすごくいいですね。ストレスはそんなにないでしょう。

先生:そうですね。かなり。

スタッフ:急がなければという感じではないということですね。

先生:

子どもたちもやはり「外出るよ」と言うと「イエーイ」という感じなので、靴下とかを入れるケースがあるのですが、誰が 1 番に靴下のケースを取れるかささっと取りに行って、「俺、1 番」という感じです。

スタッフ:それも遊びですね。

先生:

そうですね。本当にノリがいいです。まだお部屋遊びとかには逃げたい意識もあるのかなと思うことがありますけれども、お外に行くと「何しよう」となる子がいません。

スタッフ:それぞれの興味に沿って…。

先生:

そうです。でも、あっちの遊びとこっちの遊びを行き来するお友達がいるので、情報共有がされて、みんなでも遊んでいる感じがあるというか、その辺りはすごくいいなと思っています。

スタッフ:

きっと見えない先生の力が働いているんでしょうね。

アンケートにも御協力いただきました。保護者の皆さんも、16 人中 12 人の方が答えてくださっています。実は春日保育園さんだけではなくて、曙保育園さんと一番町保育園さんにも御協力いただいています。曙保育園さんは、親子で遊木の森に遠足に来ていただいて、親子の体験を私たちが対応させていただいたのですが、その保護者さんにもアンケートにお答えいただきました。わりと保護者の皆さんも自然遊びに対する意識や必要性はすごく感じてくださっています。特に春日保育園さん、これのどの方がどの保育園かは分からないのですが、見ていくと、やはり畑での短い時間でしたが、「それからは草花にすごく目が向くようになった」「虫を嫌がらなくなった」「見つけたものをいっぱい教えてくれるようになった」とか、いっぱい答えてくださっていて、すごくありがたう楽しいなと思っています。

副園長先生:(アンケートを見ながら)すごいですね。五感を使っていい目で…。

先生:すごいですよね。保育経験者なのかなと思いますよね。

副園長先生:確かに、すごいですね。

先生:これ、お母さん方のアンケートですよ。

スタッフ:そうです。

先生:すごいですよね。

副園長先生:これも素敵ですね。「最高の遊び相手と思ったら」とか。

先生:これはすごくいいですね。キャッチコピーとか使えるくらい。

スタッフ:

そうですね。でも、そういうふうに自然と遊べる子どもが育つと、本当にきっと**体も内面も強い子になっていく**でしょうね。

まだ全部そろってはいないのですけれども、すごく自然遊びへの理解度と期待度がかいま見えるような結果になっています。先生方も答えていただいております。

先生:ありがとうございました。

スタッフ:

今日はそれを持ってきていないのですけれども、やはり中を見た感じでは、本当に短い時間の体験で「どうでしたか」ということを聞いています。「短い時間だからそんなに変化が見られない」というようなお答えもありましたけれども、園ごとに見ていくと、やはりふだんの保育の中でどう遊びや野外での活動を捉えられているかという先生方の意識によって、短いたった 1 時間半の中の活動への向かい合い方が違ったんだなということをすごく感じました。

先生:

やはり保護者の方々も自然遊びにはすごく積極的なご意見が多かったので、これからもより積極的に使っていきたいと思います。ありがとうございます。

副園長先生:また来年度もあるのですか。

スタッフ:これが今年で終わりになります。

副園長先生:残念ですね。

スタッフ:

少しずつ自然遊びの意義のようなものを、こういう機会を通していろいろな園の方に知っていただき、私たちがやっていることがどう評価されるか、どう成果につながっているかというのを皆さんにこうやって御協力いただいて、それをまとめていくという方向になっています。またまとまりましたらお知らせできたらいいと思います。

副園長先生:保護者の皆さんもこういう参加型のこういうのがあるといいですね。

スタッフ:

そうですね。やはり曙保育園さんも初めて来ていただいて、初めて私たちもお会いしたという感じですが、あとほかの認可だけでも小規模保育園さんとかは、月に1回来ているところもあります。そうするとやはり、まずは先生方がそこから吸収しようというのと、やはり子どもたちも4年、5年目になると慣れてきています。子どもたちは入れ替わっていくんですけれども、先生方の積み重ねがあるので変わってきて、すごくやりやすくなっています。保護者の皆さんも年1回、親子遠足で来ていただいていた人たちだったりするので、その園がやっている自然遊びというのが一体どんな意図や狙いがあって、どんな人たちとやっているのかという、相互理解の場にさせていただいています。

副園長先生:遊木の森でその親子遠足をやるのですか。

スタッフ:そうです。現地集合なのですけれども。

副園長先生:現地集合だと皆さん自家用車で行かれるんですか。

スタッフ:そう、車です。

副園長先生:公共交通機関はあるのですか。

スタッフ:バスが出ています。

先生:ではすぐに行けるということですね。

副園長先生:それはいいですね。

スタッフ:

すごくいいですよ。大抵御夫婦で来ていただく御家庭が多くて、あとおじいちゃんおばあちゃんが来てくださったりして、すると子どもたちがやはりふだんと違う表情を見せてくれたりします。「家ではこんなところに登ったことないのに」、「えっ、この子ってこんなところ歩けるの?」とか、すごくいろいろなものを触って一生懸命観察してというところを見ていたいたりします。ふだんは都市部の公園でやります。

副園長先生:小規模園さんも公園でやっているんですか。

スタッフ:

公園でやっています。鳩の子保育園さんですけれども、0 歳児から 2 歳児まで、常磐公園や城北公園などでやります。遊具があって、あとただの広場があって、木にこういうテーブルと椅子があっておじいちゃんたちが将棋を打ったり何かやっていたりします。

あの公園の脇の木とか少し草花とかがありますので、そういった本当に小さな脇のものも使いながら。

先生:すごいですよね。

スタッフ:

そういうところでも「こんなふうに工夫するとできますよ」というものを紹介しながらしています。

副園長先生:葉っぱを取ってしまったりして大丈夫ですか。

スタッフ:

花壇のものはこちらもう気を遣いながらやっていますが、花壇からシュツシュとエノコログサが出ているので、そういうものは使ったりします。あと落ち葉や砂などを使いながら、季節の遊びを一緒に楽しんで。そうしたら、鳩の子保育園さんも以前は遊具のほうだけだったのですが「子どもたちがそっちへ行かなくなりました」と言っていました。先生方も初めは「ここで何したらいいの?」という感じだったのですけれども。

副園長先生:0 歳もですか。

スタッフ:

0 歳も全部の学年が一緒に行って、0 歳はやはりカートから初め降りられない子もいたのですけれども、そのカートの中でもできることとか、だんだん慣れてきたら土に座らせたりなんかして、その年齢にも合わせながらやっています。

副園長先生:0 歳さんってどうやって遊ぶのですか。

スタッフ:

0 歳は、初めはカートに座っている子は持たせてあげたり、少しこの辺をこしょこしょとやってみたり。

副園長先生:葉っぱとかですか。

スタッフ:

そうです。あとは下に降りたらはいずり回ったり、大きい子たちが集めてきてくれた草花とかを洗面器みたいなものに入れて、その中に手を突っ込んでみたりという感じです。

副園長先生:異年齢いいですか。

スタッフ:

いいですね。そうするとやはり、クラスごとにはきっちり分かれないうすよね。そこが入り交じりながら、大きい子がやっていることを見つつまねしてみたりするのがすごくいいです。

副園長先生:異年齢いいですね。

先生:異年齢いいですよね。私も最近そう思いました。

副園長先生:

畑、わりと 1 クラスが行ってしまうとほかのクラスは遠慮するようないところがありますけれども、そういうところはうですか。

先生:少し狭いかなという感じです。

副園長先生:2 クラスだと狭いでしょうか。

スタッフ:うですかね。

先生:

今、うちのクラスは結構走り回りたいという子が多いんです。やはりそうすると、ほかのクラスがいるとそういうのをやりたい子ができなくなってしまうようなところでは…。時期とかにもよるかもしれません。

スタッフ: よるかもしれないですね。寒い時期は体を動かしたいですね。

先生:

そうですね。がっつり動かしたいという子が多いときなどは、やはり公園や山に行ってしまっただけが走り回れるかなとは思っています。

スタッフ:

一回やってみたらいいかもしれないですね。走り合うことでまた遊びが、動きが変わるかもしれないですし。

先生:

それこそ今日も、お姉さんたちのクラスと一緒に行きましてけれども、やはりお姉さんの遊び方をすごくまねしてやるようになっています。

副園長先生:

山の中腹もすごくいいです。木の根っこはありますし、松ぼっくりもたくさん落ちていますし。

先生: あそこはいいですね。楽しいですね。

スタッフ: すごく楽しそうですね。

先生:

大きく体を動かしたい子もできますし、収集が好きな子は集中できます。距離感もいいです。

副園長先生: いいですね。ちょっとしたベンチや台があるので、そこで何か始まりますし。

先生: そうですね。

スタッフ:すごく環境がいいですね。恵まれていますね。

副園長先生:おかげさまでうちはね。ありがたいですね。

先生:近くにいろいろあってありがたいですね。

スタッフ:そういうところに親御さんが参加するということはあるのですか？

副園長先生:年に1回、参観会のような感じで土曜日に行っています。

先生:そうですね、一緒に上がりました。

スタッフ:

いいですね。そういう姿を見ていただけるのはすごくいいですね。環境もいいし、先生方もすごく育っていらっちゃって、いいですね。

先生:

さっきの常磐公園の話を知っていると、意外と畑とかでも2、3クラスで行っても遊べるのかなと思ってしまいますね。

スタッフ:

いいかもしれないですよ。

やはり幼稚園と違って保育園さんは積み重ねがありますから、私たちが本当に一般論として3歳ぐらいになってようやく「自己」ではなくて「他」を意識し始めて、年中さんぐらいになってようやく集団としてと思うんだけど、そんなことはないんだなと思います。

先生:そうですね。

スタッフ:やはりすごくいいんだなと思いますね。今日はありがとうございました。

一同:ありがとうございました。